

**令和6年度 英語教育推進事業
教育課程特例校における特別の教育課程
【実施状況報告】**

令和7年6月

池田市教育委員会

1. 概要

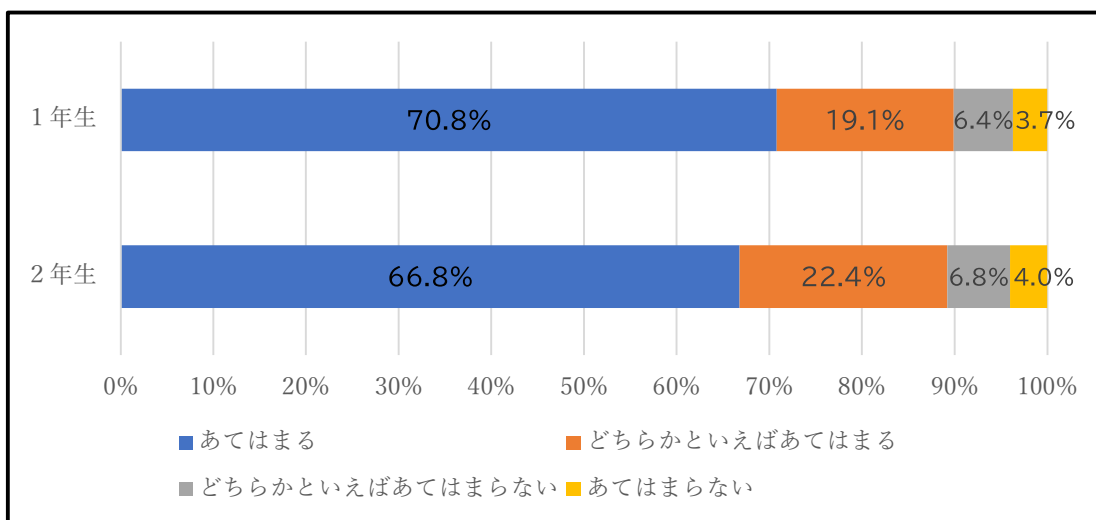
■池田市では平成16年3月に構造改革特別区域計画の認定を受け、「教育のまち池田」特区に取り組んできました。市立小学校全学年に「英語活動」を教科として導入（全学年 年間35時間）し、平成18年度より全小学校で実施してきました。平成20年7月より「構造改革特別区域研究開発学校」規制の特例措置が全国展開されたことにより、本市の特区認定は取り消され、文部科学省の「教育課程特例校」指定に移行し、これまでの特区内容の教育課程を継続実施しています。平成25年度に「教育課程特例校」の実施期間の終了を迎えましたが、平成26年度以降も継続を申請し、1～4年生における「英語活動」の授業を実施しました。現行の学習指導要領への移行に伴い、「英語活動」は引き続き1・2年生で実施し、幼稚園、小・中・義務教育学校での継続的な英語学習をすすめています。この1・2年生の「英語活動」は生活科の時間を活用して年間15時間実施しています。内容としては主に英語のリズムや音に慣れ親しむ活動を重点にし、挨拶や動作、身の回りのものを表す単語を題材にした活動を取り入れています。早期の段階から英語に触れることで、ことばや文化に対する関心を高め、正しく理解し、国際社会で生きる力を育成することをねらいとしています。中学年からの外国語活動、高学年からの外国語科への学びの連続性を意識して指導にあたっています。

■池田市では小学校6年間の英語の学習成果を検証するために、6年生を対象に GTEC を実施しています。GTEC とは、英語の4技能（聞く・話す・読む・書く）を測定する外部試験です。4つの技能を全てタブレットで測定します。子どもたちの学習成果を測定するだけでなく、課題をとらえ、英語の授業改善にも取り組んでいます。令和6年度6年生の結果も下記に掲載いたします。

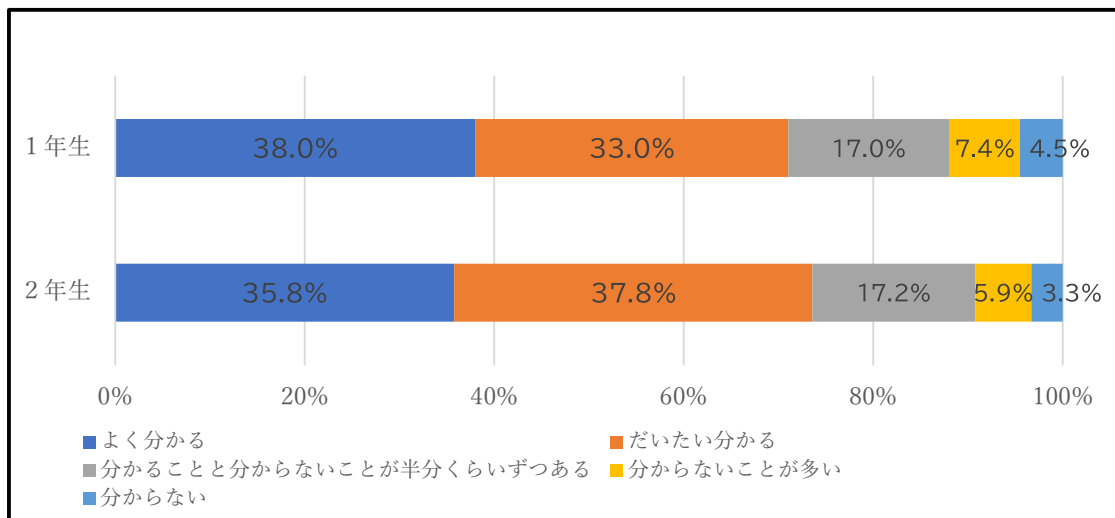
2. 池田市の児童アンケート結果

【小学校1・2年生対象（教育課程特例校における特別の教育課程を実施している学年）】

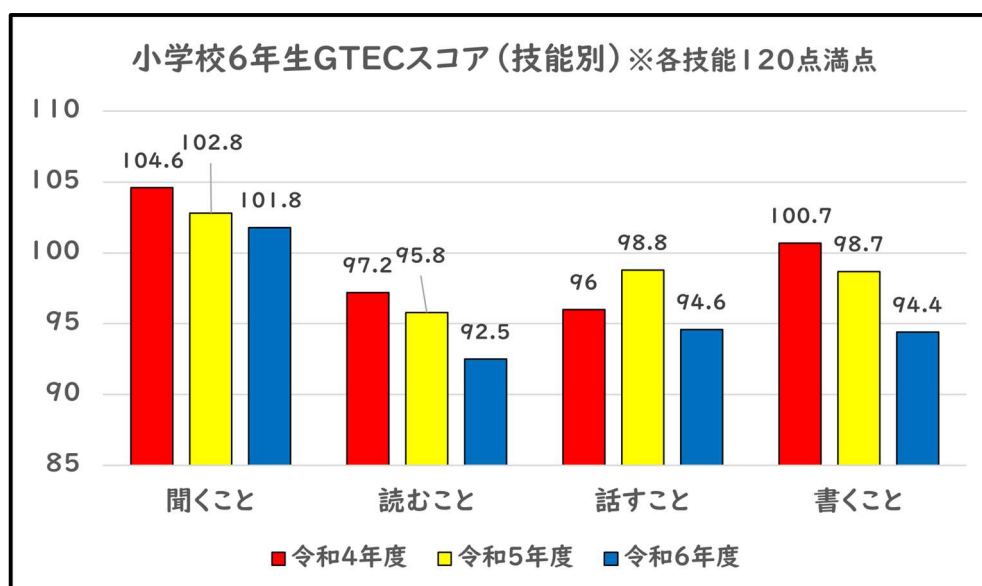
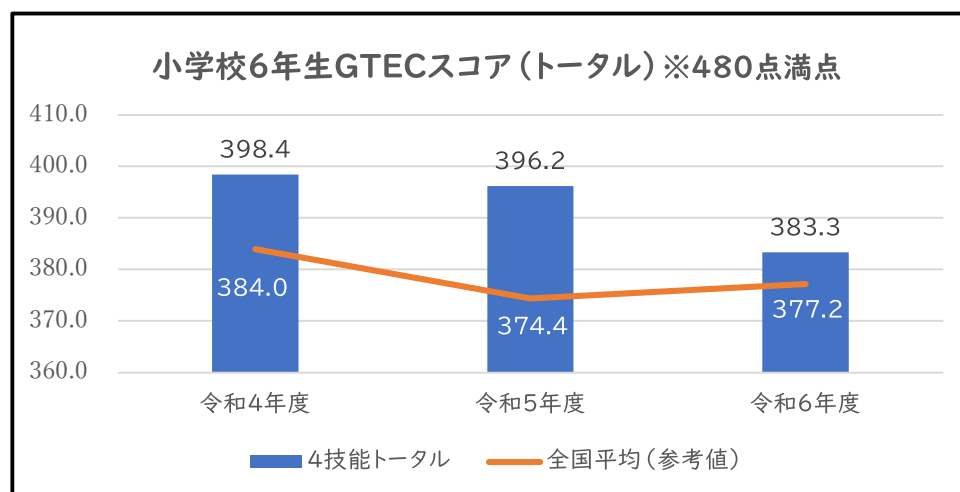
①英語の勉強は好きですか



②英語活動の授業の内容はどのくらい分かりますか



3. 池田市の GTEC のスコア推移 (令和4年度～令和6年度)



4. アンケート等の結果より

低学年の児童のうち、英語の勉強が「好き」と答えた割合が9割と高く、多くの児童が前向きに英語に取り組んでいることがわかる。また、授業が「わかる」と答えた児童も7割を超えており、活動中心の授業が児童に合っていると考えられる。一方、小学6年生を対象とした英語技能テスト(GTEC)の市内平均スコアは、引き続き全国平均(参考値)を上回ってはいるものの、やや下降傾向にあり、令和4年度の398.4から令和6度は383.3となっている。特に「読むこと」と「書くこと」の技能が下がっており、音声中心の学びだけでなく、文字に触れる活動の充実が課題であるといえる。今後は、低学年時の英語への意欲を維持しつつ、中学年以降に向けて4技能をバランスよく伸ばす系統的な指導の工夫が必要である。

5. 英語担当教員アンケート(小学校1・2年生の英語活動について)

- ・低学年から英語に触れる機会があることで、中学年の外国語活動、高学年の英語科につながり、子どもたちが系統的に、継続的に学習することができている。
- ・簡単なあいさつや歌に合わせて英語に触れることで、子どもたちが楽しく入門期の英語学習をスタートできている。また、英語学習に対する意欲が育ち、どの学年も英語での簡単な受け答えが抵抗なくできるようになりつつある。
- ・子どもたちは英語を話すことに対する「恥ずかしさ」がなくなってきたように感じている。ALT(外国語指導助手)とのやりとりやICTを使った活動を通して、英語を「使うこと」が特別でなくなってきた。
- ・学習した英語を使ってコミュニケーションができたという達成感を得るためにはどのように指導すればよいか、学年ごとにALTの意見も取り入れながら指導を行っていきたい。

6. 保護者・学校関係者等の評価

- ・家でも英語の学習について話したり、簡単な英語を使ってコミュニケーションを取ろうとしたりするなど、英語に親しんでいる様子が伝わる。
- ・英語嫌いをつくらないきっかけとして、慣れ親しむ、英語を楽しむ機会となっている。
- ・公教育での英語の入門期における学習としてとても有意義だと感じる。1・2年生は感覚的にALTの英語を吸収しており、話し方がALTに似るなど驚くような成長がある。
- ・1年生から活動を多く取り入れながら楽しく英語を学ぶことにより、学年が上がり、内容が難しくなっていく中でも、あまり苦手意識を持たずに学習を進めることができている。
- ・学校でもっと英語を使う場面、たとえば、英語を使いたくなるような「必然性」のある場面があると、子どもたちはより主体的に言葉を使うようになるのではないかと思う。
- ・大学受験を見据えると、最後はやはり文法力になるので、基本的な文法を押さえることが課題である。

7. 今後に向けて

保護者や学校関係者からのアンケート結果にもあるように、英語を使ってコミュニケーションをとろうとする意欲が育っており、学年が上がっても苦手意識を持たずに英語に取り組めている様子など、成長の実感が報告されている。また、英語技能テスト(GTEC)の「聞くこと」の技能スコアが高いことから、低学年からのALTを活用した英語の音声や表現に慣れ親しむ活動が、中学年以降の系統的な学習の土台となっており、英語学習の入門期として有意義であると言える。一方で、英語技能テスト(GTEC)の4技能平均スコアはやや下降傾向にあり、「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」のバランスを考えた授業づくりを進めていく必要がある。市としては、今後も特例校制度を活用し、低学年での学びを中学年以降へ継続できるよう、楽しさと実用性の両面を備えた英語活動を充実させていきたい。